

共立女子大学「漢文学概論B」(2-4年生)授業実践 報告

岩田, 久美加
共立女子大学文芸学部 : 非常勤講師

<https://hdl.handle.net/2324/4842527>

出版情報 : オンライン授業の地平 : 2020年度の実践報告, pp.16-16, 2021-04-30. 雷音学術出版
バージョン :
権利関係 : Creative Commons Attribution-NonCommercial-NoDerivatives International

1. 授業の目的と概要、授業内容、成績評価の方法等

本授業は、漢文学のうち詩や賦を中心とした韻文を文学史的に学ぶものである。漢土における詩の持つ意味を確認し、平仄と押韻、古体詩と新体詩の形式的な違いなどを簡単に概観した後に、『詩経』の歌謡からはじまり、五言詩の成立を確認し、宮体詩と山水詩の意味を知り、陶潜と謝靈運の自然描写の違いを学び、近代詩の完成をみて、中唐までの代表的な作品を鑑賞し、最後に日本漢詩として菅原道真の作品をよむというシラバスであった。成績評価については、後期末試験 60%、小テスト 30%、コメントペーパー等 10%の割合で成績を評価する予定であった。なお、本授業は、シラバス提出時においては、オンライン授業は想定していなかった。また、本授業は、稿者が前期担当した「漢文学概論A」と同じく文芸学部日本文学科においては必須の専門科目であるとともに、教職免許状取得においても必須科目であり、他学部や短期大学生も受講する科目である。

後期の授業については、大学からは、専門科目においては対面授業とオンライン授業の選択が可能であるが、オンライン授業の場合、学内 LMS を用いたオンデマンド型授業を奨励するとの連絡があった。また、通信状況が良くない学生に関しては、大学の PC 室を開放しているとも説明を受けた。そのため、前期の「漢文学概論A」では容量を減らすために音声なし書き言葉による PDF の配信を行ったが、後期は音声付 PPT と書き込みができる授業資料の配信を行い、より通常の授業に近い形式を行い、学生の反応を見て、音声付ビデオ配信に移行しようかと計画をした。なお、後期は LMS で 50MB×5ファイルまで一回の講義で配信できるようになったため、20~30 分の音声付 PPT を毎回 1~2 本、学生の視聴は 25~45 分までとし、その他に毎回課した出席代わりの簡単な課題の振り返りを PDF か PPT で配信し、その中で学生からその回にあった質問で共有すべきものは解説を行った。因みに、昨年まで教室で PPT を用いた授業を行った時には、アニメーションなどを用いたが、容量への負荷が大変

大きく、今回は断念した、また、スマートフォンでの視聴も想定し、最低限 20 フォント以上で PPT は制作した。

しかし、初回の授業において、7名ほど音声聞こえないと申し出た。また、前期の「漢文学概論A」と重複する受講生に「前期の話し言葉による PDF と後期の音声付 PPT ではどちらが受講しやすいか」と質問をしたところ、話し言葉の PDF どちらでも良いを合計すると丁度半数が音声なしで良いという結果であった。その理由については、話し言葉で PDF の場合、音声付 PDF だと容量が大きくなってしまった困るとか、視覚で一元化された方が集中するといったようなものであった。それに対して、音声付 PPT が良い理由としては、授業を受けている気がするといったものが多かった。そのため、学生の容量などにも配慮し、ビデオによる配信への移行は中止し、音声付 PPT での配信を行った。

2. 今後の課題・可能性、もしくは受講生の反応等

前期の話し言葉での PDF に比べ、音声付 PPT の方が授業準備時間は圧倒的に短くなり、負担は激減した。また、音声付 PPT については、「聞き流している」と思いき学生の存在も課題の反応から見てとれた。これは、通常の授業においても、座っているだけで主体的に授業を受けていない学生がいることと、同じともいえるのではないかと考える。

以上、《遠隔教育シンポジウム「遠隔」の挑戦ー2020 年度オンライン授業の課題と可能性》(2021 年 2 月 4 日)において「オンライン授業における視覚と聴覚」と題して報告したものと一部重複するところがある。